

○鷺巣氏

皆さん、こんばんは。ただいま御紹介いただきました大変難しい名前の鷺巣と申します。市民パートナーステーションという、キュポ・ラの中にありますけど、市民活動の支援促進をする施設の所長をしております。

今日はお招きいただきまして、ありがとうございます。いただいた文書の中に、大変難しいテーマですので、果たして私がお話して、それにこたえられるか、ちょっと大変心配なんですね。それから、私自身も川口生まれ、川口育ちではありません。浦和なので、その辺の川口の様子がですね、私が勤めてからしかわからないという、両方の面で皆さんの御期待にこたえられるかどうかわかりませんが、とりあえず35年以上、もう役所に勤めておりますので、役所のフィルター抜きで、本音で私個人の意見等をお話しできれば、少しでも参考になるかなと。ただ、テープを録るということなので、内容は、こんなことを、けしからんことを言ったと言われるのもちょっと心配があるんですけど。ただ、皆さんにとって少しでもお役に立てればという意味で、私が見て、聞いて、感じたもの、そのままをなるべくお伝えできたらなと思っております。

それで、1 戦後の川口市政における市民参加の蓄積全般ということと、それから2 各種住民団体の動向、それから3 行政経営と市民活動。2番と3番は何か話ができるんですけど、この戦後の川口市政における市民参加の蓄積全般、これ私も学者じゃありませんので、どこまで皆さんが求めているものに近づけるかわかりません。ただ、外から見てきた、先ほど言ったように、私は浦和生まれですので、川口というものを外から見てきた、外から入ってきたというところを見ると、多少違った見方が、ほかの職員と違った見方ができるのかなと思っておりますので、まず川口のコミュニティの独自性というんですかね、我々、私たちが住んでいた浦和だとか、それから、私は池袋にいたんですが、ちょっと池袋のコミュニティと違った特異なコミュニティがあったということですね、それと行政がどう絡んできたのかということをお話をさせていただいて、その後市民活動の今の現状と、それから新住民と言われる方々のことをちょっとお話をさせていただきたいと思っております。

私が市役所に入ったのは昭和47年ですね。ここに書いてあるように大野市政のときですね。それまでは川口に降りたこともありません。学生時代、東京に出てましたから、通学ではここを通ってはいたんですが、昔はクーラーも何もなかった電車ですから、窓から鋳物のにおいのみそ汁臭いまちだなど、こんなまち嫌だなど思いながらいたら、何かのきっかけで、先ほど東松山の話が出ましたけど、昔は東松山と川口と大変仲がいい、姉妹都市みたいな感じだったんですね。そういうことがあって、ちょうど私のおじが東松山の助役をしていたんですね。そんな縁があって、おまえはもう公務員になるしかないよと、普通の一般の会社じゃ続かないよ、タイプとしては公務員だよと言われて、公務員になって川口におり立って、今、本当に東西口がほとんども

う変わってしまいましたけれども、あの私が47年のときに川口に降り立ったときと全く変わってしまいました。

そんな状況で川口に入って、一番やっぱり驚いたっていうか、ちょっと違うまちだなと思ったのは、おらがまちだ、すごく郷土意識といいますかね、我がまちという意識が大変強いところだなという感じがしました。私にとっても、それはちょっと今までになかった、人と人のつながりが濃いんですね。それに、そういう人と人のコミュニティの強さをまた行政が支えている、組織的に支えているというのがすごく私にとっては不思議というか、ちょっと違ったところに来たような感じがしました。

例えば、公民館、それからスポーツセンター、支所、たたら荘、青少年会館、いろんな施設があるんですけども、施設そのものがコミュニティを支えているところもあって、例えば公民館が30幾つ、そのころも30近くあったのかな、町会がある公民館のエリアがあって、町会のいわゆるコミュニティセンターになっているんですね。今で言えばコミュニティセンターという感じだと思うんですが、いわゆる公民館というのは生涯学習センターなんです、川口の場合は本当にコミュニティセンターというものが強くて、そのころ、役所の中のエリートというのは公民館の館長にならないと上に上がれないというぐらい、公民館の館長の役割というのは大変大きかったですね。その中に今度は支所があって、支所がまた大きくまとめている。そんな施設と、それから役所の組織、そしてコミュニティと、一体感があって、多分、全国でも珍しい一体感。昔、松戸市で「すぐやる課」というのがありましたけれども、それは一つの課が「すぐやる課」なんです、川口の場合は全部がですね、組織全部が「すぐやる課」みたいな形で、組織的に施設、それから役所内部の組織が全部、市民の方に向いていた。ある面を考えれば、一つの市民参加、市民の苦情だとか考えていることが全部、末端からですね、どんどん上がってきた、そういう時代だったと思います。

そのほかに、全国でも珍しい町会相談員制度。これは市の職員が市内の各町会の相談員として担当の町会を持ち、町会の役員会・総会などに出席し、市からの情報を提供するとともに町会から地域の課題や要望を聴いて、市の担当課へ連絡し対応しているもので、まさに町会という地域組織と行政が一体となっている状態だと思います。ある面では、市民の意向だとかいうものをそこから吸い上げて行って行政の施策に取り込んだというふうに考えられると思うんです。そのころは広報広聴時代、いわゆる役所がいろんなことを広報する、それから、いろんな苦情を市民からお聞きする、そんな時代がこのころだったかなと思います。

私は、児童福祉課に13年ほど、ケースワーカーをやっていました。そのときも、何か困ったことがその家庭にあると、必ずだれかが助けてくれる、そんな人情味豊かな、ほっとけない、そんなところが川口のよさだったのかなと、いうふうに思っています。私は浦和に住んでいて、人と人の距離感というのは、やっぱり余り近過ぎると嫌がる人もいるし、遠過ぎると冷たくなる、その辺の難しさがあるんですけども。いい面

で考えれば、やっぱり人情味があつて、困ったことはみんなで助け合う。それから、まち全体が「おらがのまち」というイメージと、それから、一つの地区だとか町会ごとがお互いにライバルで競い合ってた。おらが町会はこんなことができる、こんなにすごいんだと。運動会なんかやると、ライバル心をむき出しにして、どっちが1位だと競ったぐらい。それがまたまちの活力になっていたという時代が、私が入った時代ごろまで続いたと。それは30年代、40年代、まさに川口が「川口」という名前を外へ広めた、そんな原動力があつたのかなと。すごい活気がありました。今でも本当にその活気というのは覚えてますけど、市役所の職員の事務服がカーキ色だった。これはいわゆる鋳物の色だつていうんで、格好よくは見えないんですけども、そういう色も鋳物の色というふうにこだわっていたというぐらい。

ただ、47年、いわゆる高度成長から今度、安定成長に入ってくるのが大体70年代。50年代、60年代ぐらいが高度成長期だといえ、70年代、まさに昭和45、46年ごろから安定成長期に入ってくるとですね、いわゆる勤労者がふえていく。これは世の中全体、日本全体が勤労者が高度成長期はどんどんどんどん出てきて、その労働者が通勤をする。通勤すると、そのベッドタウン化していく、そうすると家をどうするのかつていうんで、公団が、ちょうどそのころだと思いますけれども、公団がどんどん日本の住宅政策の中で低家賃の住宅をどんどんつくっていった。公団がどんどんどんどん出てきたというのがあって、私もちょうど北園住宅つていうところに、55年ごろですかね、住んだことがあるんですが、その北園住宅から町会の役員に選ばれていくんですね。私もその中に入ったんですが、どうしてもやっぱり、今のマンションじゃないですけど、公団だと、よそ者扱いなんですね。やっぱりおらがまちという今までの人たちの中に勤労者が入っていく。まだまだ数が少ないですけども、私自身もそういう経験があつて、住宅としての人数的には多いんですけども、実際にはその中から何人か選ばれて町会に行くんですけども、ほとんど発言しないですね。1年、2年ぐらい役員やったかな、もうほとんど何のために町会に入るのかなと思つたぐらい、余りいい思い出はなかつたんですね。

そんなことがあつたりして、47年ごろというのは、昼夜間人口、いわゆる下の、分母が夜間で、上が昼間の人口ですね、それが90%。ということは、夜つていうのはいわゆる住民、住民登録をしている人たちですね。昼間の人口というのはいわゆる通勤、通学をして出ていっちゃう人を差し引いて、さらに、川口に勤めに来る人を足して昼間の人口になるんです。それが35年当時だと95%、だから大体まちの中で完結している、動いている状態が100%近い。それがだんだん90%、昭和45年が90%ですから、もうどんどん落ちていく。47年、50年、60年、どんどん、じわじわ落ちていく時代が来て、平成2年には82%まで落ちてきます。だから、それは勤労者が増えてきて、公団ができたり、それから持ち家政策で、いわゆる新興住宅ができた。どんどん増えていくんですが、前に永瀬市長さんが最後のとき、いつ会合へ行っても同じメンバーばっか

りだということを嘆いたことがある。

100%、町会に入っていた方々がいたときには、そこの方だけ見ていれば、市政は間違いはなかった。ただ、だんだんそれに参加しなくなった人たち、新しい人たちが出てくると、どうしても地縁的な組織一辺倒のチャンネルだけではちょっと難しくなってきた。

私は、人と人がつながるコミュニティは二通りあると思っています。一つは、一番初めに、冒頭に申し上げた地縁的な、いわゆる土地に住んでいるから、みんな一緒に、仲間だから一緒に仲よくしよう、助け合っていこう、いわゆる地縁的コミュニティ。それと、もう一つは、自分がそのことが好きだから、そのことに関心があるから、そういうことがしたいから、いわゆるテーマで人がつながっていく。テーマの場合は、遠い人たちとつながっていく。これはどっちがよくて、どっちが悪いという話じゃなくて、都市化が進んできて、市民のニーズだとか、国民のニーズが多様化してくると、今までは田舎に行けば行くほど地縁的なコミュニティで十分なんです。それ以外のコミュニティは要らないんですね。それがいわゆる近代化が進んでサラリーマンが増えてきて、そこへ通っている人たちが増えてくると、これはちょっとそういうわけにはいかなくなってくる。

川口の場合は地場産業が多いですから、自営だとか、地場産業の会社勤めの人とか。そうすると、その地縁的な、いわゆるまちの中でいろいろと人がつながっていることが自分たちの生活の糧なんです。一方、勤労者が増えてくる。勤労者はそういう必要は全くない。逆に言えば、極端に言えば、寝に帰ってきて構わないぐらい。だから、周りの人とどうかかわろうと、関係ない。そういうことで、川口が地場産業、いわゆる勤労者がどんどん増えてくると、一つの地縁的なコミュニティだけのチャンネルではちょっと難しくなってきたというのが今の川口の状況じゃないかなと思っています。

正直言うと、私自身も勤労者ですから、地元の浦和へ帰ると、地域活動は殆どしていません。しかい、やっぱりその勤労者をどう地域の中に関心を持ってもらうのが大事だと思う。よく昔から川口にいる人は、川口に住んでいるんだから川口を好きになろう、好きになるべきだ、関心を持てと、強制的に言われるんですけども、どだい郷土愛っていうのは、そこに生まれて育って初めてはぐくまれるものであって、いきなりそのまちに来て郷土愛を持てと言われても、それは難しいものだと思います。じゃ、どうするのかということが、そこに住んでいるから人と関わればなくて、先ほど言った、テーマで、自分はこういうことが好きだ、こういうことがやりたいということなら、どこでも行っちゃうんですね。それがそのまちで何か自分の関心があることで何かできれば、なかなかこのまちもおもしろいじゃないか、ここで自己実現ができれば、人とつながれば、ああ、結構このまちも楽しいな、住んでよかったなと思います。

ですから、そういう勤労者、新しい人たちにとって、そこが自分の自己実現をする場所だと、そういう環境がいっぱいそろっていることがこのまちが好きになっていく。だから、新しい人、若い人、それからサラリーマンの方にこのまちについて関心を持ってもらうためには、やっぱりテーマ的な働きかけが必要だろうと。それが岡村市政になって、人づくりの一環としてボランティアによるまちづくりをしようということになったんですね。

先ほど地縁とテーマというお話をさせていただいたんですが、やっぱり新しい人、若い人たちは、自分の好きなこと、やりたいことを持って活動をする人たち、そういう人たちがどんどん増えていくこと、それがまちに関心を持つことになろうと思います。この今回の自治基本条例にしても、多分この川口のまちを知ろうと思って参加したんじゃないくて、自治基本条例というものに興味を持ったからだろうと思う。それが自治基本条例を考えるなかで川口のまちに関心を持って、川口のまちを知ろうとする。私は、そういう部分から川口のまちを知るチャンスがあるというのは、これは素晴らしいことじゃないかなと。ですから、何も地縁的なことだけで川口のまちに関心を持ったり、好きになったりするだけじゃない。もちろん、そういうことも大切ですけども、そういうもう一つのファクター、チャンネルがあってもいいんじゃないかなと思っています。

2番目に入ってくるんですけども、そういう形で市民活動というものを、テーマコミュニティをつくるためにも、ボランティア活動、NPO、市民活動というのが必要だろうと思っています。市民活動をやっている人たちの多くがマンションに住んでいる人が多いんですね。やっぱりテーマ的関心から川口のまちについての興味を持つということが、やはり大きいのではないかなと思います。

そのボランティア活動について、ここで少しお話をさせていただきたいんですが、宮原委員もボランティア活動に参加されていますが、障害者の団体に入っているんですけど、ボランティア活動にはお詳しいと思いますが。昔のボランティア活動というのは、川口のボランティアの歴史というものになるのかわかりませんが、やっぱり福祉であれば、障害者のため、老人のため、お年寄りのため、それから子どものため、そういう人たちのために尽くすのがボランティアだっというイメージが今までのボランティアにはあったんですね。それから、施設のボランティア、例えば図書館の読み聞かせなんかも図書館のためにやる施設ボランティア。そういう、何というか、自分を殺すわけではないんですけども、献身的に尽くすことがボランティアというイメージがありました。ボランティアをやらない人たちがよく、あれはボランティアじゃないよとか、あれこそボランティアだと言いますが、陰でやってて余り目立たないで、もう本当に偉い人たちがやっているというイメージがずっとありました。川口でも、私も47年から児童福祉課で13年やってて、いろんなボランティアさんを知ってますけれども、やっぱり尽くすタイプのボランティアが主流だったんですね。それが当

たり前で、特別な人だと。それが阪神・淡路大震災で、1995年の大震災で大きく変わりました。

それは130万、150万という人たちが、被災地に飛んでいった。それがいわゆるボランティア元年と言われておりますけれども。多くの、行った人たちの6割が若い人たち。それから、もちろん多分ボランティアをやったことがない人たちがどんどん押し寄せるようにやってきた。しかし、私は、たくさんのボランティアが被災地に集まったからということでボランティア元年があったとは思わないです。それは多分皆さんもそうだと思うんですが、あの被災地の状況を見て、毎日テレビだとか新聞で大々的に流して、何か自分も機会があったら行こうじゃないかと、何かあったら助けたいという気持ちになったと思うんですね。それが小さな子どもから寝たきりのお年寄りまでも、機会があれば何かやりたい。それはまさにボランティアマインドを全国民が持った。そうすると、今まではボランティアなんていうのは、ああ、おれとは関係ないなという感じの人たちがボランティアをやっている人たちを見て、おれもやりたいなと、私も何か機会があればボランティアっていうものに対して何かできるんだなというイメージを持った。それが私はボランティア元年につながったのかなと思う。そして、その後のNPO法の成立につながっていった。

そういうことで、ボランティア活動が、困った人たちのためにあるということだけではなく、もうちょっとさらに進んで、自分たちが何かできるかという一つの自己実現、自分たちがやりたいっていう衝動、思い、そういうところから出てきた活動になってきた。それが市民活動という盛り上がりとなっている。人のためだとか、社会のためだとか、地域のために何か役立ちたいという、強い本人の意思が前面に出てきているのがこれからの市民活動なのかなと思います。

そういう状況の中で、ボランティア係ってというのが10年前にできたんですが、まさに人づくり、その人がどう輝くか、その人がどう自己実現をするか、その中で生まれてくる知恵とエネルギーを社会や地域の発展に活かしていく。ボランティアをやる人たちがいるからボランティアをするんだという時代じゃなくなった。福祉のために今までは、福祉が整備されてなかったんでね、それで福祉の補完のために、行政の補完のためにボランティアが活用されたところがあるんですが、しかし、今ではいろんな制度が整備されてきて、基本的な生活上で障害者だとかお年寄りが困ることはなくなった。あとはどれだけ、ノーマライゼーションじゃないですけども、ハンディがある人もない人も豊に生きていくためにはどうしたら良いのかを一緒に考えていくことだろうと思う。ボランティアする人、される人の関係ではない。ボランティアする方も感動して自分の心が充実するというのは、障害者そのものがボランティアになっている。お年寄りもそうですね。子どもたちもそうだと思います。子どもたちのためのボランティアというのは、子どもたちからいろんなたくさんのエネルギーをもらう。そういう相互作用のボランティア。ですから、市民活動、ボランティア活動というの

は、本人の生きがいだとか、本人の自己実現とか、そういう部分で支えて、それが結果として生み出された知恵や力が社会に生きて、地域に生きていくという時代だろうと思います。そういう変遷の中で、川口が進めてきた人づくりの面からの市民活動支援促進が私は大きいのかなと思っています。

さきほど、新住民の話をちょっとさせていただいたんですけれども、特にマンションの人たち。皆さんの中でマンションに住んでいる方がいらっしゃるかわかりませんが、何しろ近所づき合いが嫌いだからマンションに住むという動機が確かにあります。隣同士の煩わしさが嫌でマンションに住むというのが事実あります。地縁が嫌いだからマンションに住むんだけど、実際にはマンションそのものは共同住宅なんですね。自分で勝手に取り壊したりもできない。いざ修繕となると、みんなの同意を得なくちゃいけない。一戸建てだったら、もうどんどん修繕をしたり、いろんなことができるんだけど。結局、コミュニティ、みんなとつながっていかないと、何事も進めていけないのがマンションなのです。

あるマンションのエレベーターに防犯カメラをつけたんですって。そしたら、用をなさない。だれが住んでいるか互いにわからないから、防犯カメラをつけても怪しい者かどうか分からないっていうんですね。防犯というのは、まさに住んでいる人たちが互いに知らなけりゃ、何の意味もない。昔、私が公団にいたときは、いわゆる廊下が井戸端会議の場なんですね、子どもを見ながら隣のお母さんたちとが一日べちゃべちゃ話している。マンションも同じ集合住宅なんですけど、つくり方が全くもう個の住宅になっている。いざ防犯、いざ防災となったときに困る。

そこで、もう一つ、今必要になってくるのが、やっぱりマンションのコミュニティをどうしていくのかというのが大きい問題。というのは、マンションのコミュニティができてないマンションは、修繕ができなくなってくる。そうすると、マンションの資産価値が低くなってくるので、そんなマンションを出たいという人が多くなってくる。もうスラム化しちゃうんですね。そういうマンションがいっぱいまちなにできたら、もうとてもこのまちはひどい姿です。これだけマンションがあって、経済が潤って、いろんな人がいっぱい増加しても、結局はまち自体が壊れてしまいます。だからこそマンションの人たちはコミュニティ、特に周りとのコミュニティよりも先にマンションの中のコミュニティをつくっていくべきだと思いますね。そこから始まっていかなければ、もちろん自治っていうのは難しい。

それと、マンションの人たちは東京へ通っていて、結構、大学の先生がいたり、結構レベルが高い人が多いんです。そういう人たちがどんどん川口のまちをよくするための人材となってほしい。まちが劇的によくなるには、バカの者、よそ者、若者っていうんですね、よそ者がやっぱりかき回していく。よそ者が新しい血を入れていく。川口は川口のまちのよさがあるんですけども、このまちがもっと他のまちよりも輝いていくためには、やっぱり新しい血、新しい刺激がやっぱり必要だろうと思

ますね。

この世の一番の悪は無関心である、よく言います。関心がある人の方が、いくらクレームでも、市政に文句を言っても、市政に関心がある、社会に関心がある、そういう人たちの方に対して尊敬しなくちゃならない人たちだと思います。よくクレーマーだとか、それからモンスターペアレントとか言いますが、自分の利益のことだけは極端に言いますが、それ以外は無関心だと。自分の関心があって何かクレームつけたかったら、そのことがみんなもそう思っているんだらうから、みんなと一緒にそれを正していこうよというふうに社会化すればいいんですけども、全く自分の子、自分のことだけということが多過ぎます。そういう人たちが今マンションに集まる特に傾向があるんですね。

ただ、その人たちの力を借りなければ、やっぱりまちは良くなっていかない。両方やっぱり必要かなと。地縁的な人のつながりがなければ、まち全体は動かしていけない。ただ、新しいことを踏み出そう、それから新しいことを何かやろうといったときには、やっぱり少数ですけども、そういう先鋭的な、それに対してすごくこだわっている人、まあ逆におたくみたい、そういう人たちがいて、まちを変えていく。そして、それを地縁的な人たちにも刺激を与えまち全体で変わっていく。

川口の場合はそういう環境がたくさんあるんです。例えば、生涯学習で言えば、公民館がたくさんあります。これは自分の何か自己実現、何か人とつながりたいという場がたくさんあるということです。それから、図書館、これも知的欲求、いわゆる何か勉強したい、何か勉強したりすると、今度はそれを活かしたい、どこかで、だれかとつながって、評価してもらいたい、それを聞いてもらいたい、そういう欲求に変わっていく。

飯塚2丁目町会の町会長に2日前に会ったんですが、この方はサラリーマンで、やめて、それで町会長になったんですが、とっても新しい発想をしていて、今までの形の町会じゃだめだよというんで、どんどん新しいことを興している。それは古いアパートの2階を使って、そこに町会でお金を出して子育ての拠点をつくって、お母さん方が小さな子供を連れて、そこがたまり場になっていく。また、地元に大きなマンションができたときには、その新しい住人に対してウエルカムコンサートをやったんです。マンションの人たちに、どうぞいらっしゃいましたということですね。マンションの人たちを町会にどう引っ張り込もうかというアイデアをたくさん持っているんです。それもやっぱり新しい形なのかなと思います。錦町町会なんかはもう8割がマンションの人たちなんです。そのマンションの人たちの中から、今、町会長が生まれているんですね。ホームページを持っている町会が7町会ぐらいあるんですかね。ホームページをつくって、町会に入っていない人たちに呼びかけようと。ですから、川口の新しい芽、新しいものが少しずつできつつあるかなと思います。

官から民っていう、今、はやり言葉になっています。これは世界的な潮流で、イギ

リス、アメリカ、カナダ、いわゆる行政をもっと小さくして、小さな政府にして、ど
んどん民に任せていく。ある面では私も必要だと思うんですが、ただ、すべて市場経
済に全部任せていいのかなという疑問はあるんですが。「官から民」の「民」は、単に
「民間」の「民」、いわゆる企業ベース、市場経済、市場原理だけの「民」じゃなくて、
もう一つ、私は「市民」の「民」があって、「公」を市民が担っていく、その部分で、
直接的にはなかなか行政改革に結びつかないかもしれませんが、それでも「民」が「公」
を考えていく、担っていく、関心を持っていくということが必要だろうと思います。
だから、「官から民」の「民」は、「市民」の「民」をもっと地方分権、今までの分権
は官官分権で、国から県、県から市に行くだけだと。今後、本当の地方分権で市民に
どれだけの権限が移譲されるか。そのためにも、「官から民」の「民」の市民がいろん
なことでかかわっていく、そういうことをコーディネートする、そういう環境づくり
をつくっていくことがこれからの行政の仕事なのかなと思います。時代は変わってき
ました。その時代に合った行政のあり方をやっぱり考えていかないと、行政そのもの
が市民から見放されちゃうなというのをつくづく感じます。

今までこうした仕事を10年間やってきたんですが、市民の方と色々なことでどん
どん盛り上がってきたんですが、役所内部のことの影響力は全くなくてですね。結局
は市民との協働、それから自治っていうのは、市民にまちのこと、社会のこと、地域
のことを関心を持ってもらう。逆に、余り関心を持たれると、うるさくなるから役所
は、やりにくいという感覚は正直ありますが、でも、それはやっぱり役所の都合です
よね。本当の究極の我々、行政の目的は、市民が自分のまちは自分たちで考えてやっ
ていくんだと、そういう人たちを多くすることが我々の仕事とすれば、確かに我々の
仕事に対するクレームだとか、苦情だとかね、いろんなことを言うてくるかもしれま
せんけど、そういう人たちが多ければ多いほど、住民自治、市民自治が達成されるな
らば、我々はそういう人たちを増やしていかなくちやならない。無関心の人たちをど
う呼び覚まして関心を持ってもらうかです。そういう市民と一緒に考えよう、一緒に
やっついこうというスタンスをとっていかないといけない。うるさいからそういう人
たちは要らないんだというのは時代じゃないんですね。

懇談会だとか、審議会とか、いろんな委員会がありますけれども、その中にそれ
に関心がある人が意見を言う、私はそれが当然だろうと思います。バランスよくいろん
なところから選出したっていうよりも、それに関心がある、それにこだわっている人
たちの意見が、一部の意見だっていう言い方をする場合があるんです。でも、会社で
も、何か商品のクレームが来れば、そのクレームはその中の氷山の一角かもしれない。
もっとその底辺にはそう思っている人がいっぱいいるんだというぐらいの気持ちを持
たないといけない。どうしてもバランス感覚で、文句を言うてくる、それに関心があ
る人たちは「おたく」、その人たちは極端な人だっていう言い方をする場合があるん
ですけども、それはやっぱりそのことにこだわって、社会とか地域を真剣にそのこと

が必要だと、課題があるというふうに思った人たちですから、そういうことを、やっぱり意見を大切にしていける必要があります。

少し長くなってすみません。以上、私がいろいろこの35年間の話を感じたことを率直に申し上げました。

以上でございます。

○金井部会長

どうもありがとうございました。大変貴重なお話だったと思います。

それでは、皆さんから、どんどん御自由に御質問を出していただければと思うんですが。いかがですか。

では、ちょっと私の方から最初に。大体行政というのは町内会といいますか、町会っていうか、地縁型に対応することには比較的なれているということがいろんな自治体であるんですけども、実際、川口の多くの職員がそういうのに、10年ボランティア活動ということで市長も音頭を取ってやっているわけなんですけれども、なかなかやっぱり職員の体質ってというのは変わらないもんですか。

○鷺巣氏

そうですね、10年間、私、このボランティアとか市民活動に取り組んでいるんですけども、そういうセクションがあると、みんなそこへ持っていったらいいんだという考えが強くなるんですね。その前を考えると、ボランティア活動は社会福祉協議会なんだという時代があったんですね。役所にボランティアをやりたいということでボランティア的な人が来ると、「はい、社会福祉協議会」っていうふうに、みんな向こうへ下請けしちゃうというのがあったんですね。それが、それじゃいけない、阪神・淡路大震災があって、いつもそういう人たちと顔の見える関係を持とう、行政もそういう市民活動、ボランティア活動の窓口というのをいつもやっていることが必要だろうというので、そういうセクションができたんですね。そうしたら前と同じように、今度は行政の中にそういうセンターができると、そこへみんな追いやっちゃうんですね。

だから、福祉のことで市民活動したい、ボランティア活動をしたいというと、じゃ、ボランティアサポートステーション、市民パートナーステーションというふうに、結局うちの課には関係ないことだということになっちゃうんですね。いつも言っていたのは、ボランティアサポートステーションは、市民が一番近くて市役所に一番遠いと言っていたんです。そうしたら本当に市内に遠くなってしまい、結局、市内に影響力がなくなってしまったんです。市民側だけが盛り上がりつつも、その市民側の知恵とか力が役所の内部に活かしていかなければ、何のための市民活動の支援だかわからない、ということに気がついてですね。これは各職場各職場がやっぱりボランティア活動、市

民活動、それから市に対する関心、それからまちに対する関心、そういう人たちをどんどんどうぞ来てくださいというふうにウエルカムの状態をつくらないと変わっていかないと思います。

そういうことで、これからは協働ということを前面に、市民側だけじゃなくて、庁内に対するアプローチもしようというふうに考えています。市民パートナーステーションは、私はアンテナショップだと思ってますから、これは市民のいろんなことが私のところに届いてくる。それを役所にフィードバックしなけりゃ、何のための役所なのか、役所の方から遠くなって、糸の切れたたこになっては、我々、役所にいる必要性もなくなってきますので、そういう意味で、いろんな情報を相手の課に対して、嫌な思いはするかもしれませんが、けんかしても、いろんなことを伝えていきたい。それが私のこれからの使命じゃないかなと思ってますね。

○金子委員

ボランティア組織とか地縁組織のいろんな意味の重要性は、人間の社会にとって極めて大事だと思いつつも、今、話を聞いて、発見したというか、感じたのは、飯塚2丁目で子育ての部屋を借りてやったと。というのは、ボランティア、ボランティアと言っても実際どのぐらいを、ステーションの方で把握しているのか知らないけれど、言ってみれば、集うところがないと。そういう地縁組織の場合は、それぞれの地域性もいろいろあるけれど、かつては大きな家のうちのところに集ってみたり、あるいは町会会館に集ってみたり、公民館に集ってみたりと、いろんな集う場所というのがあつた。あるいは、スポーツ的な、スポーツというのはボランティアかどうかかわからないけれど、野球やったり何かしたりするというんで、入り口はそういう集うところがなくちゃいけないので、川口駅前にあるサポートステーションのところに、打ち合わせの場所は結構ですよと、こういうだけでは、さっきテーマコミュニティという話ができたけど、テーマコミュニティにしよ、であればあるほど、居酒屋でやるっていうこともあるのかなと思ったり、いろんなことを聞きながら感じてたんですが。

そういう点についての、つまり何百団体があつて、その人たちが、どういうところに集って、そういう意味の、要するに行政に言い分があるということの受け場所にするんだという話を聞くと、施設をつくれとか、そういう話も、川口に公民館があると言ってもね、これは30万人時代の30幾つなんですよ。今、50万人になったというんで、そういうときは、やっぱり施設面においては、公民館の数で全部比較しちゃういけないと思うけど、そんなことを感じながら、どういうふうにしたらいいのかなという、それを実現するというのではなくて、どうも議員となるとそういう話になってしまうけど、関係なく、感じたことを教えてください。

○鷲巢氏

コミュニティというのは、人と人がつながることです。人とつながる場面とか機会とかね、そういう環境が一番、数が多ければ多いほどね、まちが活発になるし、まちが良くなると思います。子育ても同じなんです。今、子育ての集う場所というか、出会いの場所を求めているということを考えると、いろんな多様な出会いの場、それから機会がどんな世代でも必要です。若い人たちがなかなかそういう、学校以外に場がないというのは、やっぱりそういうたまり場になるようなところもつくっていく必要があります。

さらに言えば、団塊の世代がどんどん年寄りになって、団塊世代にとって、年をとったらゲートボールと、老人会と、たたら荘、これだけは嫌だなというのが合言葉になっているんです。そうすると、これからの人たちはたたら荘をまた違った形に変えていっちゃうだろうと、その団塊の世代が。そうすると、やっぱりたたら荘あり、それから公民館あり、青少年センターあり、スポーツセンターあり、いろんな場が確かに川口の場合はほかの市よりも多いです。でも、さらにもっと細かにね、出会いの場、つながる場っていうのが、これからは地域地域に必要なと思うんです。

ボランティア団体、市民団体やっている人は、何もうちのところで打ち合わせするのはうちの方が便利な人だけなんです。それ以外の方は情報を得たり、それから違った人と会う場なんです。そういう人たちはちゃんと地域で公民館でやっていたり、それから居酒屋でやっているかもしれませんし、いろんな自分の都合がいいところでやっているんです。だから、そういうもの、やっぱりセンター的な情報がたくさん集まるところ、人がいろんな行き交うところのセンターものが一つは必要だと。そのほかに地域に、酒場でもいいだろうし、町会会館でもいいだろうし、アパートをだれかが提供してもいいし、自宅を開放してもいい。そういうことをやりたい、つながりたいっていう場がたくさん用意できるか、役所がそういう場をたくさん用意する仕事をやろうというふうにするか、それが大きなまちのこれからの方向かなと思います。

単純作業なんかはもうどんどん民間に任せるという事態も出ているわけです。でも、コーディネーター、まちのコーディネーターはやっぱり役所の人間が市民と一緒にアンテナを張ってやる、ということが必要になってくるかもしれません。

正直に言うと、川口のまちは、初めは好きじゃなかったんです。役所に入った当初、鋳物くさいし、地域の人と人が密なんです。濃過ぎるんです。それがあまり好きではなかった。しかし、特にこの仕事をやり始めて、本当にこの川口のまちというのが、私が今、住んでいるまちと違ったいろんな可能性があるまちだと思う。多様な受け入れ場があるというか、これは、ある面ではごった煮ですよ。いろんなものが入り込んで、古いものから新しいものまで、それがあるというのは川口のよさじゃないかなと。だから、いろんな人たちを引き寄せる。引き寄せると、いろんな商売でもいろんな可能性が出てくる。外国人も多いしね、いろんな多様な人たちがいます。そういう意味

では、自己実現がこのまちでは他のまちよりもできるまちじゃないかなというふうに感じます。それをうまく住んでいる人たちはメリットとして感じて、このまちを良くしようというふうになれば、もうほかのまちに比べられないぐらい、もっともっと良さが出てくるんだろうと思います。

○宮原委員

今、所長の話の話を聞いていると、私、思ったんですけど、まさにこの前、12月7日に行われた川口マラソン、26回目を迎えたけれども、26年前は800人ぐらいで募った大会、それが今回は5,800人、もうごった煮ですよ。もう異業種の人、若い人、子どもは小学校1年生から、お年寄りももう80歳代の人まで、よくぞこんなにたかが走ることにお金まで出して。4,000円お金を出して走るって知ってましたか。ただで走るんじゃないんですよ。お金出してまで走って。でも、あれだけ盛り上がってきて増えたというのは、まさに今までお話したことを本当に象徴しているような感じがして、だからこそ、私、一般質問のときに、車いすの部や、今は初めて視覚障害者、聴覚障害者の人たちが走っているけれども、視覚障害者の部、聴覚障害者の部、車いすの部、ちゃんと設定して、それを受け入れてくれないかって言っていました。どうして受け入れてくれないのかってというのは、ふだん道路を車いすの人が走れないから、それが困っているから、走らせてあげてほしいと言ってるんじゃないんですよ。ノーマライゼーションですよ。みんなと同じく走りたい、沿道を、普通、車が走っていて人が走れない場所を通ってみたいということ、ボランティアのまち日本一を目指しているのに、どうして川口市は、市長は、それを、簡単なことなのに実現してくれないのかなと思いますか。

理由は、例えばそういう人たちが道路を走ると、道路が危ないんじゃないとか、そういうことじゃないんですよ、ボランティアというのはね。私は今現職じゃないから、今こう言ったのを必ずやるとは言いませんので。どうしてできないんだと思いますか。

○鷺巣氏

その状況はちょっとわからないんですけども、すべての人が参加できるものじゃないと、やっぱり市民的なイベントになっていかないですね。外国人もそこに最近参加するようになりましたよね。外国人も今までは単に支援をする人たちだっというところから、これからはコミュニティーの一員として考えていかなきゃならない。そういう時代なので、一人でも多くいろんな方々が集う、いろんなイベントに集うということがこれからは必要だと思いますね。

○宮原委員

沿道なんかは地縁者ですよ。町会の選ばれた担当の人たちがわざわざ立って、警備

にあたってくれているんですね。だから、同じようなことが、ふだんの生活の中にもマンションの人たち、地縁者とか、うまく取り込めたら、本当にすばらしいまちになるのになって、いつも残念に思うんですね。

もう一つちょっと聞きたいんですけど、最後の一般質問のときにお伺いしたんですけど、私が今から言うことは突拍子もないことかどうか、そのボランティアにかかわっている驚巢さんにちょっと個人的に答えてほしいんですけど。川口マラソンは青木公園じゃなくて、スタートを川口駅のキュポ・ラの前、川口駅の真ん前でスタートして、距離なんか3キロでも、10キロでも、フルマラソンでもいいんです。川口の中を全部車も止めて。車を止めるということは、CO₂削減のための地球環境に役立つわけですよ。車も止める。そして、その沿道には地域の人たちがみんな集う。そこで、自分たちがつくったものを売ってもいい。お店を出してもいい。出店を出してもいい。何かそういう発想っておかしいですか。鼻で笑って結構なんですけど。その1日だけボランティアの日、マラソン大会の日じゃなくて、ボランティアの日として、まちを止めちゃう。そして、みんながこのまちのために何をしたらいいのか。走りながら、沿道で応援しながら、まちの道路だったり、景色だったり、吸う空気のおいしさだったりを考える日が1年に1回やってほしいといったこと、おかしいことですか。

○驚巢氏

1日だけでも、ノーカーデーじゃないけれども、駅前の車が出入りしない空間をつくらうということとマラソンとがマッチングをするといいですね。スポーツが環境分野にも影響を与えていくということです。

○宮原委員

組織も全部ボランティアで募って市民から。

○驚巢氏

それは、すばらしいことです。ただ、市役所からすると、止めるには警察が要るとか、いろんなことがいろいろ出てくるでしょうけれども。宮原委員さんはマラソンという、走るということですね、いわゆる市民が一緒になる、それからまちが生まれるということにやっぱりこだわっていらっしゃる。そういうことを、夢を実現したいという、ボランティアさんっていうのはみんなそうなんです。結局はそんなに現実的じゃないことも結構言ってくる人もいるんですけど、でも、その志だとか、夢だとか、それがまちが変わっていく。例えば、よさこいソーランなんかね、単に自分の母親、生まれた高知のよさこいの踊りをぜひ北海道でやってみたいと言った、その学生の一言であれが広まったんですね。

だから、一つの志、一つの夢がまちを大きく変えることがたくさんありますから、

それは市民運動として、やっぱりどんどん継続していかないと、一度ぶち当たってダメだったから終わりというんじゃないで、それが少しずつ変わっていくことじゃないかと思いますよ。

ただ、難しいことで、たくさんいろんなものがあるだろうけれども、でも、その夢を追いかけて、そういう人たちがどんどん集まったりしてくると、そういうことだっでできないはずないですよ。東京都だってね、あそこをとめて、全部やっちゃいましたからね、マラソンをね。

○宮原委員

何で東京でできたのに、川口ではできないのかなと。私のこの情熱をぶつける、まだ1回しかやってないんですけど。あきらめてはいませんが、もっともってっていくつもりではありますけれども。わかりました。ありがとうございました。

○鷺巣氏

それは、だから絶対夢はあきらめない。それを実現するためにどうしたらいいのかっていうことを絶えず考える必要性がありますよね。それが、そういう大きなことがいつか夢が実現になることもありますので、ぜひそういう市民団体をつくってください。

○宮原委員

この私の2つの質問の中でね、どうしてね、鷺巣さんの今、話してくれたことに、私は考え方とかすごく引かれる部分があるけど、やっぱりどうしてそれが市の中に浸透していかないのかな、浸透していくように努力がされているようには感じないんですよ。それは、どこがネックなのかと思いますか。

○鷺巣氏

やっぱり時間がかかる問題が一つありますね。私もそのテーマでずっと役所の人生それで来たんで、それが広がっていかないのは私自身の力のなさかなと思ってはいるんですけども。でも、市民の力だとか、市民活動、ボランティア活動がどんどん高まって行って、それを考えないといけない時代だっているのはもうひしひしと市職員はわかっています。ただ、それをどういうふうに、どう活かしていくのか、そのノウハウがわからないんです。それはありますね。

○池田委員

今ね、川口マラソン、確かに毎年ふえてるんだけど、私なんか、こう参加者を見ると、参加者はふえてるんだけど、その参加者の連帯というのが、年に1回あそこには

参加するけど、それで終わり。それで、だんだん、私も出てみようとかというけど、今、宮原委員さんがおっしゃったように、もし今、その8,000人の人たちがネットワークをつくって、年に1回じゃなく、これを自分たちが今みたく全市に向けてやりたいとかっていう、そういう機運が、私なんか外野で見ているんだけど、とりあえず参加だと、年に1回だから4,000円払って参加して、自分もその中で自己満足といっちは失礼ですけど、常日ごろの成果を発揮すると。でも、それが終わってしまうと、あれだけ8,000人集まった人たちが、全部個々にまた帰ってしまう。その辺が、行政にしてみると、何人入ったから、来年は9,000人行くかもしれないと、それだけがひとり歩きして、あれだけの人数が集まったものが、全然お互いに連絡がない。終わってしまうと、もう個々に戻ってしまう。

だから、もし宮原委員さんがそういう基盤を持っているんだしたら、ああいう人たちを次のステップ、やっぱりネットワークをつくってもらって、あれだけの人たちがそういう希望を声を大にするのだったら可能かもしれないけど。それが非常に、私は毎回こう見てて、ふえてきているところを見ると、ああ、あの人はうちの町会の人だとか、あの人はマンションの人だったけど、それが来年は、みんなが出るから私は出ただけで、それ以上のことは、あとは関係ないもんと。うちの家族が満足してれば、その8,000何百分の1人になって、それで終わったら、あとは関係ないよという感じの、うちの地区から出ている人なんかはね。

○宮原委員

面倒くさくないんですね、そういうのだとね。

○池田委員

そうそう。だから、今言ったように、自分の希望はやるけれども、もしそういう話をする、そんなのは誰かがやるべきじゃないかとなると、宮原委員さんが言ったように、ものすごい支障があって、なかなか動かないのかなっていう、これは客観的に見てるんだけど。もし、あれだけ毎年集まっているんなら、ネットワークみたいなものができていてもいいのかなと思うんですけど。

○宮原委員

できてはいますよ。

○池田委員

一部でしょう。

○宮原委員

一部っていうか、まあ半数ぐらいの中には。

○池田委員

5,800人のうち2,000人近くできているということですか。

○宮原委員

だけど、そこに新入りが入ってくるのは、今、言われましたとおり、ネットワークからは入る手段がないのかな、そうですね、言われてみればそのとおりですね。

○池田委員

今言ったように、町会と新しいマンションの人みたいに、最初から参加している人と、何だ、最近来たのかっていう人も、何となくこう見ていると、毎回出ている人はコミュニケーションを図っているけど、新しい人に対してはこんな感じでね、コミュニティが。これはあくまでも私の主観なんですけど。今、宮原委員さんがおっしゃるように、そこまで進めたいんだったら、やっぱり1回、そういう参加している市民の核の人、とにかく2,000人ぐらいだしたら、1回開いて、今、宮原委員さんが言われたように、こういうことをしてみたいと思うんですけど骨を折ってもらえませんかとかね、そういう形ができれば、また一つ上の段階に行けると思うんですけど。私が身近に見ている参加者を見ると、私はこれに15回連続出ているけど、あの人はたった1回目だとか、来年は来ないんじゃないかとか、そういう話をしているのを身近に聞いていると、なかなか、今、川口が置かれている立場というのは非常に、そういうものと似ているんじゃないかなと思うんですよ。

○宮原委員

人生相談みたいになりましたけど、ありがとうございます。

○鷺巣氏

この市民マラソンを支えるっていうか、企画段階から入っていく人たちは必要だと思いますね。今までの人たちだけじゃなくてね。体育協会は体育協会じゃなくて、市民のマラソンをすごく楽しみにしていて、マラソンにこだわっている人たちの意見を聞きながら実行委員会みたいなのができてくると、そういう意見がどんどん出てくるかもしれませんね。

○宮原委員

マラソンにかかわらず、野球でもサッカーでも、みんなそれぞれ組織があるので、

ただ、それがこう一体になれないというか、やっぱりもっていけない理由というのが、わからなかったですね。

○池田委員

単純な質問でいいですか。私なんか、地区にこう、大きなマンションが南平地区はエルザの55や35をはじめ、たくさんのマンションが建っているんですけど。ある町会の場合、従来のいわゆる町会活動をしている人に4倍ほど新しい人がいて、この間ちょっと聞いたら、古いというか、前から住んでいる役員さんは、ああいう人が入ってくると、かき回されちゃうとか、話が見えないとか、権利ばかり主張して義務をやらないんだということなので、それならかえって入ってもらわなくて、我々がやったほうがうまくいくと。

ところが、今、元郷2丁目さんは、運動会なんか2年前は弱かったんですよ。ところが、最近、学校を通じて若いお父さん、お母さんが出てくると、我々の町会は40代から50代なのに、その町会だけ20代とか30代なんですね。もう点数もダブルスコアぐらいになってきて、逆に言うと、だんだんそういう成果が出てくると、参加者が多くなってくる。たまたま今回はリレーで転んでしまって、何か3点差か何かで準優勝になっちゃったということで、非常に反省会では悔しがっていて、来年はもっと万全を期そうとかね、もうそういうことで、ちょっと年配者とはうまくいかないけど、小学校とか父兄の中ではかなり、学校を媒体として。ですから、参加者なんかもテントなんて、我々の地区より倍以上広いですよ。まず、年齢層が全然違う。うちはもう30年前から同じようなメンバーがいるけど、そこはもう本当に私なんかでもわからない若い方がいっぱい出ています。ですから、そういう形をうまく利用すれば、そういう人が入ってこられるのかなと思うんだけど。ところが学校出ちゃうと、はい、それまでになっちゃうんですよ。

○鷺巣氏

マンションの人たちの多くは30代、40代だと、一番忙しい時期なんですね。

○池田委員

でも、子どものためには出てくるんですね。

○鷺巣氏

そうです。子どもだとね、出てくるんですけど、それ以外は出てこないですね。

○池田委員

でも、子育てが終わるから、余裕が出てくると思うんですけど。

○宮原委員

でも、入れ替わるからいいんじゃないですか。その人たちが出てこなくなったら、また新しい人が入ってきますから。

○池田委員

やっぱり地域活動やボランティアはつながっていかないと。だから、神尾さんなんかを見ると、まれな人だと思いますよ。きっと学校でやっていただいて、恐らく学校での役員時代に目をつけられて、無理やり何だかんだで引き込まれて、それで町会活動に入ったら、もうちょっとやさっとじゃ抜けられないですよ。

○池田委員

それで、バレーボールに入って、バレーボールのキャプテンやるようになると、号令かけができるでしょう。そこは使われますよね。「神尾さん、バレー部集めといてね」とかね。

○神尾委員

そうすると、「あなた、みんなを連れてきてね、責任者よ」とかね。

○宮原委員

気にいった人が引き込むっていうのは、川口独特ですね。

○神尾委員

だから、私、町会の大先輩方と仲がいいんですよ。そのかわり町会の会議に出たって、「はい」だけなんです。意見なんか言いません。にっこり笑って「はい」。もめません。

○池田委員

マラソンはね、宮原委員さんがそれをやってみてくれたら、もうちょっと広がるんじゃないですか、エネルギーたくさん必要かもしれないけど。5,000人近く集まるといいうんですから。

もう一つ、よく言うんですけど、たたら祭りね。あれはもう毎回委員というのが決まっているんですよ。もっと言うと、何だか知らないけど、新しい人が入ろうとすると、たまたま私、しかたなく入ったことがあったんですけど、何で来たんですかと言われてたんです。もう何か歴代の役員が決まってて、やることも全部決まってて、反省会も新しい人が入っていけない雰囲気なんですよ。

○宮原委員

もうあの浴衣というユニフォームにそでを通すまでには、レギュラー枠というのがあるんです。そういう人はいいんだけど、やっぱり本当に踊りたいと思っている人はたくさん本当はいるのに、そでを通せないんです。

○池田委員

ことしの炎天下なんか、健康状態が危ないんじゃないかという人だっていて、救急車を呼ぶ状態になるかなという・・・。

○宮原委員

手が震えて踊っている人いますよ。

○池田委員

もう定年制を引いた方がいいんじゃないかなんていう。

○鷺巣氏

それでも出てくる人がいるっていうのはすごいですよ。さいたま市とか以前の浦和とかはお願いして出てくるんですから。

○宮原委員

うちはもう自主的ですよ。

○鷺巣氏

でしょう。だから、それだけこのまちに対する関心が強いというのはね、これは大切な財産ですね。

○池田委員

順番は回ってこないですよ。70とか80の人が踊っていると、町会40人という、古い順からになっていると、もう本当に新しい4、5年の人なんかは予備軍みたいですよ。こっちが亡くならないと、回らない感じ。

○鷺巣氏

市民団体の人に声をかけても、なかなか出てこないんですよ。これは本当に割り切っていますからね。どっちがどっちというわけじゃないんだけど、やっぱりお互いにお互いを知って、お互いを評価するということが必要で、町会の方々はね、何だ、ボランティア、ボランティアっていつてね、おれたちだってボランティアだと、何であ

いつらが勝手なことで、勝手なこと言ってるだけじゃないかって言うでしょう。市民団体の人たちは、町会だけがまちを担ってるんじゃないかって、おれたちだってまちを考えているんだというのと、お互いに接点がないもんだから、批判し合っているんですよ。私は、それはおかしいし、お互いに持ち味があって、お互いにできないことがあるんですよ。それをやっぱり知った上で相互乗り入れ。だから、町会活動からボランティア的な、例えば介護の問題を勉強し始めるとかね、それから市民活動をやっていた人が町会の役員をやるとか、ごみ出しを当番でやっていくとか、そういうことがね、相互乗り入れをして初めて川口の本当のテーマとそれから地縁がね、2つが一つになると思う。今はもう分かれたままです。それをどうにかして一つにしたいというのが、定年まであと2年ですけど、何かそういう場をつくりたいなと思ってはいるんです。どっちも大切なんです。

○宮原委員

でも、鷺巣さんがさっき言っていた、町会相談員さんは、市の職員さんですか。

○鷺巣氏

そうです。

○宮原委員

ごめんなさいね、勉強不足で。今もいるんですか。

○鷺巣氏

やっています。今もいます。私も町会相談員をね、マンションでやったことがあるんです。マンションへ町会相談員が行くでしょう。行くとね、もうすごいですよ、批判、不満、市役所に対する。そこで退いたら、おしまいなんです。それを私はね、1件ずつ全部丁寧にメモって、それで担当課へ行って、それでこたえていって、それをもう3回、4回していたら、変わってきましたね。これは違うなど。一般の人というのは、やっぱり役所に対するイメージというのはそんなよくないんですよ。今、テレビだって、年金問題だの何だの言ってるでしょう。それはだれだって役所との直接意見交換がなければ、やっぱり言いたいことは言いたい。自分のうちの近くの道路がおかしいとかね、福祉は何もやってくれないとかね、それを言うてくるのはわかっているんです。でも、それを全部言い尽くして、それに誠実にこたえると、向こうが変わってくるんですね。

そのぐらいやっていかないと、もう市民団体はうるさい、それから市民はうるさい、そこでもう閉じちゃったら、いつまでたってもお互いにまちをつくっていかうということにならないですね。うるさいからやめちゃうとかね。やっぱりそうじゃなくて、うるさい声の中に貴重なものがある。クレームの中に厳しい声のバックにさらにいっ

ばいあるんだというぐらいに、やっぱりクレームとか文句とかいうのは大切という土壌をやっぱりつくっていかなくちゃならない。それはさっきの大野市長時代のときには、じかにがんがん役所にいろんなところから電話がかかってくると、職員が飛んでいくんですよね、役所全体がすぐやる課みたいなものでした。そのころの市民参加はまた今とは違いますけれども、行政と町会が一体となってまちをつくってきた。まさに協働です。

川口はこの自治基本条例が大きな私はスタートというか、切り替え点だと思います。こんなに多くの公募の市民がいろんなことを皆さんと一緒にやっている、議員さんと一緒にやっている、これはもうすばらしいことだと思いますよね。お互いの立場をみんな理解しあっています。

○野村総研

今のお話のところで、済みません、ちょっと確認をしたいんですが。川口市としては町会相談員ですとか、まちかど懇談会ですとか、市民の声を聞く場なんですよ。意見を聞く場。パートナーステーションもそうです。そういう場はたくさんあります。ただ、聞くだけに終わっている場合もあって、聞いた後、それを市政に活かしたり、市職員の意識を変えたり、あるいは検討した結果をまた市民に戻してコミュニケーションしたりという、その部分、要は聞く部分はできているけれども、聞いた後の部分が不足しているという、そういう御理解ですか。

○鷺巣氏

そうですね、その部分をやっぱりこれから……。ただ、ある委員会だとか審議会の公募の枠をつくりましたから、そこで随分変わってくるだろうし、これから総合計画が出てきますので、総合計画にどう住民自治というのが活かされていくのか、私も興味のあるところですが。

○神尾委員

まだ私の頭の中はいろんな言葉が錯綜してしまっているのですが、まとめて上手に伝えることができないかもしれないんですけども、先生のお話の中で、オタク、極端な人という言葉が何回か出てきました。もしかすると、そのオタク、極端な人というのは、現在のボランティア活動やNPOを象徴する一つの特色をあらわす言葉なんではないか。

○鷺巣氏

私はその言葉が大嫌いなんです。ただ、あるとらえ方とすると、それにこだわっているから極端だと。こだわっているからこそバランスがないというんですけども、

私はそれは逆なんですね。こだわっているからこそ、新しい課題を見つけて、新しい動きをする人たちなんです。そういう人たちを本当に大切にしないでと私の信念で持っています。

ただ、違った言い方をすると、あの人たちはそれしか考えてない、バランスが悪いから、もっとバランスのいい人たちの意見を聞かなくちゃだめだということで排除される可能性があるんですね。それは絶対おかしな考えです。そういうマイナスのイメージじゃなくて、そのことに関心があって、そのことに対して精通しているならば、我々よりもっと知識を持っているわけです。

○神尾委員

次なんですけど、でも、でもオタクのままではだめでしょうって私は思います。市民活動家として人間として成長できるかどうかという器がそこにあるかどうか。

○鷺巣氏

もう1段階上になると、単なる思いつき、確かに思っただけ、それから志だけっていう部分があります。これはもう情報がないから、しょうがないんです。でも、私はその部分は大切にしたい。でも、いろんな情報を聞いたり、いろんな人たちに会っていくと、その活動とか思いがもっと高まってくるんですね。だからこそ、こういう市民参加、市民参画の中で、市民も、市民側もね、単にクレームだとか、それから批判してるだけじゃなくて、自分たちが何を担えるのか、何ができて、何ができないのかということをやっぱり昇華していかなくちゃならない。そのためには、単に市民活動そのものがいいんだというだけで、ほめたたえるつもりは全くありません。それをもっと高めてほしいというのがあります。

○神尾委員

活動や思いが高まる、練られていくためには、何世代か越えていかなくてはいけないと思うんですけども、NPOですとか、そういうのがどうしてもできては消えて、できては消えて、リーダーが不在になると自己分裂、つまり継続性がない、練られていけないという、組織の何か弱いところがあるかと思うんですけど、その辺はどうでしょうか。

○鷺巣氏

NPO法ができて、ボランティア団体が組織化、いわゆる法人化して組織として活動ができるようになったといっても、結局はボランティアに、極端な言い方しますと、やっぱりちょっと毛の生えた存在であるというふうに見えるような団体が結構多いですね、NPOでもね。やっぱりそれが本当に社会の担い手となる大きなNPOになる

ためには、やっぱり何世代かたたくちゃならない。NPO法ができてから、来年でちょうど10年になりますけれども、やっぱり成熟しなくちゃならない。

ただ、そのNPOが次代を担う、それから社会を担うNPOが出てくるためには、もっともっとそのすそ野がないといけない。突然に社会を動かせるようなNPOが出てくるわけじゃなくて、そのすそ野の中には、人のため、社会のために何かをしたいというボランティアマインド、いわゆる社会貢献マインドが小さなころからたくさんあって、そして、そういう人たちの中でNPOが出てくる。だから、NPOがいっぱいいろんな多様な、それから、すばらしい全国的にも大きなNPOが出てくるためには、そのすそ野、いわゆる生態系のピラミッドじゃないけれども、その下には多様で豊かなボランティアマインドが市民の中に出てこなければ、やっぱりきちっとしたNPOというのは、社会を動かすようなNPOというのはね、出てこない。

川口のNPOが今70幾つぐらいありますか。でも、ほかの市町村に比べて別に多いわけじゃないんです。ただ、私、あと何年かして10年たてば、そのすそ野はすごく川口の場合は必ずあると思うんです。だから、もうちょっと待てば、大きなNPOが出てくると思います。ただ、NPOもお金がないんですね。お金の問題でやっぱりつまずいて、専従の職員がいなければ、やっぱり市の業務委託を受けたり、市と並んで公を担うことはなかなか難しいですよ。

○神尾委員

そうですね。そのリーダー不在になってしまって、いい活動をしていても空中分解していた、してしまったNPOを助ける、サポートする、そういうものはありますか。終わったら終わって、さようならですか。

○鷲巢氏

一つは、もうNPOの宿命というか、ボランティアの宿命というのは、志がある人がこの指とまれで始めるんですね。その人がちょっとこけたら、結局解散しちゃうと。これはもうしょうがないんですね。ある半分はしょうがない。

もう一つは、財団だとか社団だとNPO法人以外の様に財政的にきちっとした、職員もちゃんという、そういうNPO法人が必要だろうと思います人が変わっても、必ず志は残り、継続的に社会を担っていくようなNPOも不可欠です。今の財団法人なり、社団も含めて非営利な団体を全て一緒に考えていく必要があります。

○神尾委員

私は、川口に住んで今、墨田区で働いているんですね。今日付けの広報すみだに載ってました。リーダーが不在になり活動が停止して困っているNPOの方は相談してくださいと、派遣員を、そういうふうに広報に大きく出てたんですよ。

○鷺巣氏

私は、リーダーは市役所が派遣するものではないと思いますね。自主的なものであって、壊れては消え、壊れては消え、これはもうしょうがないことだし、それがエネルギーだと思うんですよ、半分はね。確かに組織立ったNPOは必要だと思います。

NPOのほとんどがいきなりNPOなんです、今は。NPO法ができたときの想定は、ボランティア団体が法人化しよう、それをさせようということが趣旨だったんですけども、そうじゃなくて、ボランティア団体もNPOになったって余りメリットがないから、NPOにならないんです。ほとんどが、これはいい面と悪い面が両方あるんですけども、活動経験がないまま、いきなりNPOになってしまうのです。その立ち上げ者は大体ね、中高年です。中高年の男性なんです。組織が好きだから、組織をつくりたい。組織をつくることはいわゆる目的化しているんです。

○神尾委員

やはり自己満足のレベルでしかない、当てにならないのでしょうか。

○鷺巣氏

そこで今、考えられるのは、つくるときに相談してくださいと。だから、書類をつくったり、組織するのは大好きなんです、男っていうのは、サラリーマンは。だから、NPOのほとんどが休止状態が多いんですよ。つくっちゃってから何しようかって、何にもすることが決まってないという。

ただ、プラス面があるんです。それは今、ボランティア活動とか何かっていうのは女性が多いんです、大体。でも、男は入るすき間がないんです。恥ずかしい。でも、NPOだったら格好いいから、男は、団塊の世代がね、定年退職になったら、NPOをつくろうと、何人か集めてつくろうと。そういう男性が入り込む要素がたくさんあるんです、NPOには。

○神尾委員

だから、思ったんですが、例えばNPOの人たちって、すごく豊富な知識を持っていたりするけれども、活動の基金がなかったり、場所がなかったり、どうしようかなっていう、いろんなことがあって、だけど、そういう人たちを、例えば川口なんかは、植木のまちだったりするわけじゃないですか。そことくっついて、植木大好きNPOみたいなのを、それをもうちょっと違う形で引っ張ってきて、植木フェスティバルとか、何かそういうフェスティバルをやっちゃえば、植木を育てることが上手で販売ルートも持っているんだけど、フェスティバルまでは手が回らない植木の人たちが駅前とNPOと一緒にフェスティバルやったら、京浜東北線や道路を使って、いっぱいフェスティバルに植木を買いに来るんじゃないのかな、なんて私も思ったんで

すが。

○鷺巣氏

それはそういうノウハウを持った、商売と、いわゆる最近コミュニティービジネスというのがはやっているんですね。だから、そういう部分は男性は大好きなんです。自分の培った経験を活かして、そういうところはね、お金が入るとね、専従の職員が雇えるんですよ。だから、そこにビジネスが多少入ってこないと、大きくなれないんです。

○神尾委員

フェスティバルが好きなんですよ、フェスティバルとか、カーニバルとか。だから、やって、そこにキノコの会とか、ススキの会とか、野鳥の会とか、森の会とかで、何かコーナーつくって、ドングリマジックとかやって子供を集めて。

○鷺巣氏

今日、たまたま緑化センターの職員が来て、施設の活性化のためにボランティアだとかNPOとつながりたいという話なんです。だから、そういう人たちが集まる可能性も十分ある。施設を活用して、植木なんかビジネスになりますからね。それを志とビジネスと一緒にしたのがコミュニティービジネスです。それが男性は得意ですから、そういう部分でNPOが育っていくというのがありますね。団塊世代の受け皿です。社会貢献の受け皿として。

○神尾委員

そういうフェスティバルがあれば、必ず若いお母さんは我が子の手を引いて、お勉強みたく行きますよね。それから、例えばクリスマスシーズンなんかは今、一番はやっている電飾キラキラ系が、電飾キラキラ系大好きフェスティバルの何かNPOさん、とにかくああいうのをつけたくてしようがないのみたいな人たちがやったら、デートの場所になって、ああ、このまちに住みたいって、またカップルも来ると思う。

○鷺巣氏

2000年のミレニアム記念として、リリアパークにイルミネーションを市民が企画してやったことがあるんだけど、きれいでしたよ。それで、3年ぐらい続きました。

○神尾委員

もうやってないんですか。

○鷺巣氏

もうやっていません。

○宮原委員

きれいだったのに。

○鷺巣氏

お金がかかるんです。商業の方はね、何であっちでやるのかって、商売にならないんです。こっちでやってくれって言うんです、東口でやってくれと。でも、東口でやったらお金を出してくれるのかって言ったら、それは商売のためにやるもんだから、市民のものにはならない。なかなか難しいところですね。

○神尾委員

そこが新しい路線、まさに模索する新しい相互乗り入れなんじゃないでしょうか。

○鷺巣氏

そうですね。それは男性がこれから、団塊の世代が社会貢献にかかわってくる、それから地域にかかわってくるというのは、やっぱりビジネスの部分だと思うんですね。

○神尾委員

そしたら、ポインセチアとか、シクラメンとか、がんがん買いに行きます。ついでに物も売れちゃったり、植木鉢とか。

○金井部会長

大変盛り上がって、これ8時には終えるようなことで大体やっていて、大分長くなってしまったんですが、大変貴重なお話をいただけたと思うので、インタビューの第1部の方はこのあたりで終わらせていただければと思います。どうも本当にありがとうございました。